金沢大学・台湾大學　研究交流講演会

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23965

12. ズバラの砦

よって、ドーハに新たな都市が築かれた。

９．ズバラ遺跡の調査と観光

カタール政府はズバラ遺跡を世界遺産候補として申請し、書類不備として 2004 年に審議対象外となったが、2008 年に暫定リストに記載された。カタール政府は 2008 年からコペンハーゲン大学考古学のインゴルフ・ツィッセン教授と共同プロジェクトとしてズバラ遺跡発掘を開始し、遺跡整備事業を進めている。2009 年 11 月に我々が遺跡を訪れたとき、20 人ほどが発掘調査を始めていた。彼らは遺跡に建てた家に住む。トイレも水洗でシャワーもある。作業員の手配が遅れ、まだいなかったが、ドーハから毎日車で通う予定という。いずれテント村ができ、作業員もここに半年住むことになるだろう。発掘に参加している人々は 75%がイギリス人ですでに中近東で発掘に参加していた人々が多く、通常はロンドンなどで緊急発掘に従事していた。コペンハーゲン大学と契約しているが、冬の半年間の発掘であり、大学は学期中で学生の参加は難しく、考古学の発掘専門家が有給で雇われている。英国人の他はデンマーク、ニュージーランド、ドイツ、ポーランド人がいた。26 歳以上の考古学発掘専門家が参加条件であり、学生はいないため、精度の高い発掘調査が行われると言う。

カタール半島は以前、温暖な気候であったため、石器時代から人々が住んでいた。この地域が乾燥化し砂漠となった紀元前４千年紀からは、人々の居住の痕跡はきわめて少ない。ポルトガルはペルシア湾岸の各地に砦を建設したが、カタールには存在しない。当時は支配する地域としての魅力がない荒れ地が広がっていたとも想像される。18 世紀にカタールを支配したサーニ家 Al-Thani は、真珠採取とその取引を支配し、100 年後にはカタールの統治者になる。ズバラ Zubara の支配者はハリーファ家 Al-Khalifa であったが、隣国バーレーンの統治者となり、両家は対立することが多かった。サウジアラビアとバハレンを結ぶコーズウェイがカタールまで延びるため、ズバラ遺跡の周辺の遺跡調査も併せて行われている。ズバラと同年代の陶磁器が採集される遺跡も近辺に点在していることが判明している。

アフガニスタンと比べ、カタールは石油や天然ガスが豊富で豊かな国である。各国から援助をもらわず、ヨーロッパ人たちを自前で雇って調査と遺跡保護を行っている。遺跡の周辺に住民は住んでいない。遺跡が破壊される危険はないが、カタール政府は観光目的で遺跡保護と周辺の開発を計画している。壊れるから保護するのではなく、利用するために開発的修復をしている。遊園地建設に近い発想である。ズバラ遺跡も世界遺産、観光、遺跡保護の関係が大きく変化している様相がわかる典型例の一つである。

(e-mail: tatsuosasaki@hotmail.com ;
hanaesa@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)

金沢大学・台湾大學　研究交流講演会

日時：1 月 7 日（木）13:00 ～ 16:30
場所：金沢大学 中央図書館 AV 室
受講料：無料
謝 明良（国立台湾大學考古学教授）「葉文皿について－台湾高雄県左營清代鳳山県旧城聚落遺跡出土の青花葉文皿を中心として－」
坂井 隆（国立台湾大學考古学教授）「世界文化遺産の問題点 －東南アジアを中心に－」
STOLYAROVA Nina ストリャロワ ニーナ（金沢大学大学院人間社会環境研究科客員研究員・元タシケント国立総合大学考古学教授）、SMAGULOV Erubulat（カザフスタン国立考古学研究所・サウラン市遺跡発掘調査隊長）“New Investigation and discoveries at Sauran city in South Kazakhstan”
田辺勝美（中央大学教授・元金沢大学考古学教授）「アフガニスタン北部出土の二仏並存図について」

高浜　秀（金沢大学考古学教授）「中央ユーラシアの複合弓について」
佐々木花江（金沢大学埋蔵文化財調査センター准教授）「世界遺産候補カタール国ズバラ遺跡の現状」
佐々木達夫（金沢大学考古学教授）「アフガニスタンの世界遺産バーミヤーンの現状」

公開講座「日本海の海上交通史と水中考古学 」

日時：1 月 30 日（土）10:30 ～ 16:00
場所：サテライト・プラザ（金沢市西町
TEL.076-232-5343）、定員：30 名（申込期限 1/15）
受講料 1,350 円（高校生以下 900 円）
佐々木達夫（金沢大学歴史言語文化学系）
「考古学から日本海に沈む歴史を探る」
田嶋正和（加賀市歴史文化課）
「橋立・塩屋・瀬越と北前船の里資料館」
垣内光次郎（石川県埋蔵文化財センター）
「内灘砂丘に埋もれた海岸の遺跡と日本海交易」
佐々木花江（金沢大学埋蔵文化財調査センター）
「海底から引き揚げられた陶磁器と金沢の城下町発掘品」
小川光彦（日本海域水中考古学会）
「沈没船と積み荷の海底調査風景」

『金大考古』投稿規程

1. 原稿は e-mail で編集委員に送る。
2. 校正は編集委員及び執筆者が校了を同意するまで行う。
3. 査読は編集委員２名を以って行なう。
4. 原稿の著作権は著者に属す。ただし、電子データ等の公開権利は金沢大学及び金沢大学考古学研究室が有する。

『金大考古』執筆要項

1. 原稿の書式
文字版面は、A4 版横書きで、24 字× 42 行の横 2 段組。余白は天 30 ミリ地 27 ミリ左 22 ミリ右 22 ミリ。ヘッダーには「金大考古 号数，発行年　筆者・論文名・ページ数」、フッダーにはページ番号をつける。
2. 書体
論文タイトル・著者名・見出しは MS ゴシック、本文テキストは MS 明朝を使用する（和文）。欧文の場合、Times New Roman を使用する。
3. 原稿・図版類の入稿形態について
原稿は、テキスト形式を基本とし、図版類は JPEG 形式など汎用性のある形式でのデータ提出とする。その他のデータ形式での入稿は、編集委員と協議する。
4. 使用言語は日本語、英語、中国語を基本とする。
5. 文章表記について
度量衡単位は cm、kg、m^3等のように記号を、数量は算用数字を使用する。
6. 註・参考文献について
註は通し番号を付し、文章末尾に一括して掲載する。本文中の参考文献は執筆者と刊行年を明記し、引用箇所が明確な場合はそのページ・行数を参考文献とともに記入する。
7. 挿図・写真図版について
a. 挿図はデジタルトレースまたは手書きトレース済みの完全版下とし、縮尺・写植・見出しなどの指示を入れる（写真図版も同様）。
b. 編集作業を潤滑におこなうため、割付見本を作製すること。
c. 挿図および表は典拠を明記する。但し執筆者自身の原図･表の場合には断る必要はない。
8. e-mail アドレスを論文末尾に掲載

『金大考古』編集委員

小川光彦（金沢大学大学院生）、垣内光次郎（石川県埋蔵文化財センター）、勝俣竜哉（御殿場市教育委員会）、小松隆史（井戸尻考古館）、酒井 中（金沢大学大学院生）、桜井秀雄（長野県埋蔵文化財センター）、佐々木達夫（金沢大学教授）、庄田知充（金沢市埋蔵文化財センター）、高濱 秀（金沢大学教授）、野上建紀（有田町歴史民俗資料館）、前田清彦（鯖江市教育委員会）、八木 聡（金沢大学大学院生）渡辺芳郎（鹿児島大学）

金大考古第 65 号
金沢大学人文学類歴史文化学コース
大学院人間社会環境研究科
考古学研究室
920-1192 金沢市角間町
kanazawa-u_koukogaku@live.jp
2009 年 11 月 30 日